■中勘助 小説家、詩人。特異な人間関係に生き、青年たちから「中せんせ」と慕われた。「銀の匙」は現在なおベストセラー。

なかかんすけ

内閣発足・1885＝

東京神田で、岐阜の旧今尾藩士で維新後神田の藩邸で家令を務める中勘弥の五男に生まれる。母鐘。兄4人の内、3人は夭逝、次男金一、長女はつ、次女ちよがいた。母の姉(「銀の匙」の「伯母」)も同居。

初の対等条約1888＝ 3歳

帝国憲法発布1889＝ 4歳

足尾鉾毒始・1891＝ 6歳

妹栄が誕生。
小日向水道町の新築の家に移る。末妹やすが誕生。
正規の学齢より一年早く、市立黒田尋常小学校に入学。
幼時より病弱で、14も年上の兄金一から苛められて育ち、

日清戦争始・1894＝ 9歳

八幡製鉄始・1897＝12歳

卒業し、城北中学校に入学。
家の宗派は曹洞宗だったが、早くから、特定の宗派に属することを嫌うところが見られ、

教科書疑獄・1902＝17歳

日比谷公園・1903＝18歳

兄金一が12年下の野村末子と結婚。第一高等学校第一部に入学。
イギリス留学より帰国して一高教授に就任した夏目漱石の講義を聞く。
漱石門下で、一般上の野上正一郎の妹弥生子の初恋の人でもあった。

日露戦争終・1905＝20歳

ドイツ留学から帰国し、福岡医科大学の教授に就いた兄金一からなお、誹謗、侮辱、嘲笑、冷遇、虐待され続ける。東京帝国大学文科英文学科に入学。講師を兼任していた夏目漱石の講義を引き続き聞く。

満鉄発足・1906＝21歳

韓国反日暴動1907＝22歳

伊藤博文暗殺1909＝24歳

父が死去。
国文学科へ転科し、
卒業。直前、兄金一が妻末子の父の葬儀で上京中、脳溢血で倒れ失語症、大学を辞職して病床生活に入ったため、一家の全責任が肩にかかってくる。介護する義姉末子とは年齢が近かったため、愛情を寄せられるようになるが、金一の身体的能力と執拗な嫉妬心は衰えず、ついに家出、放浪のような生活に入る。

韓国併合・1910＝25歳

大逆事件判決1911＝26歳

明治天皇没・1912＝27歳

一年志願兵として近衛歩兵連隊に入隊。状況ごとに、日記を書き続けるのが習慣で、著作のもとに、
衛戍病院に入院し除隊。信州野尻湖畔安養寺に仮寓。湖中の弁天島に籠り、日記「鳥守」を書いて、帰京。
信州野尻湖畔に滞在し、「銀の匙」を書き上げ、原稿を夏目漱石に送る。一高同級小宮豊隆の推薦で「夢の日記」を発表。帰京し上野寛永寺山内真如院に移る。末妹やすが死去、「妹の死」を書く。

大正政変・1913＝28歳

第一次大戦始1914＝29歳

21ヶ条要求・1915＝30歳

民本主義・1916＝31歳

ロシア革命・1917＝32歳

大暴落・1920＝35歳

原敬首相暗殺1921＝36歳

一高以来の親友山田又吉が安倍能成宅で自殺。夏目漱石の推薦で、「銀の匙」が「東京朝日新聞」に連載。
脚気療養のため信州追分に転居後、比叡山の横川恵心堂に住み、「銀の匙」の後編「つむじまがり」を執筆。
「銀の匙」後編「つむじまがり」が「東京朝日新聞」に連載される。
山田又吉遺稿を安倍、岩波と編集出版。一高同級の江木定男の長女妙子を熱愛し始め、小児愛性向顕著、
茨城県布川の徳満寺に滞在。前年に漱石が死去、「漱石先生と私」を発表。

水平社結成・1922＝37歳

(新潮社)より「提婆達多」を刊行し、皆を驚かせる。妙子の父江木定男が死去すると、13歳の妙子とは父代わりという以上の緊密ぶりの一方、定男の未亡人で美人の万世から言い寄られるなど、かわし続けるなど、不健全ともいえる男女関係を続ける。この年、和辻哲郎の娘の5歳の京子への思慕から、童話を書く約束。
母、兄夫妻のために、赤坂区表町に家屋を購入。{思想}に、露骨な性的描写含む「犬」を発表、多くが伏字になるが、岩波茂雄の尽力で罪は問われず。末子や万世との関係、妙子や京子へ愛などが背景になったか。

護憲三派圧勝1924＝39歳

治安維持法・1925＝40歳

日本時代始・1926＝41歳

金融恐慌・1927＝42歳

海軍軍縮条約1930＝45歳

満州事変・1931＝46歳

五一五事件・1932＝47歳

国際連盟脱退1933＝48歳

自らは、避寒・避暑を兼ね、神奈川県平塚に家屋を新築。さらに多くが伏字の「犬 附島守」を刊行、以後、一高同級岩波茂雄の{岩波書店}から、手賀沼住まいの「日記体随筆「沼のほとり」、
*「銀の匙」が刊行されるが、あまり反響は無かった。
経済学者猪谷善一と結婚し万世との不仲もあって、心労絶えない。妙子のために、「菩提樹の蔭」を執筆し、

帝人疑獄事件1934＝49歳

芥川直木賞始1935＝50歳

二二六事件・1936＝51歳

日中戦争始・1937＝52歳

日記「病床」から「沼のほとり」まで含めて刊行。京子への童話の約束を「鳥の話」にすることにし、
平塚の家を処分して、兄金一の赤坂の家に同居、隠遁・逃避から、世俗内禁欲に転換。「しづかな流」、
思想弾圧が強まるなか、福島県白河のキリスト教信者青年塩田章と教会の親友吉田重太郎が、ミニコミ紙「やまびこ」を創刊。この頃、(嫉妬から解放され)新しい心境に入ったという。{思想}に「雁の話」を発表。
母が死去、「母の死」を{思想}に発表。塩田が応召・除隊のなか、「やまびこ」に数人の仲間が参加。
塩田は福島のセツルメント活動開始。詩集「琅?」。『銀の匙』が岩波文庫に入る。「母の死」刊行、
詩集「機音の音」、詩集「海にうかばん」、
詩集「吾往かん」。{思想}に発表してきた作品をまとめた「街路樹」を刊行。この中でも、映画「制服の処女」
を何度も見に行ったことなど、小児愛を吐露。塩田章が読書会で取り上げられた「街路樹」で、初めて中勘助
を知るも応召したため、託された庄司辰雄が初めて勘助宅を訪問するも出征。戦時体制が進むなか、青年ら
にとって中立保つ勘助は救いであり、勘助にとっても思慕してくれる青年の存在が救いになる。

健保+総動員 1938＝53歳

第二次大戦始1939＝54歳

詩集「大戦の詩」、
詩集「百城を落とす」などの戦争詩も、戦争の悲惨や無残な戦死をうたっている。前年末に除隊した塩田が
初めて勘助宅に来訪するも、来客中で話せず、詫び状(第1回手紙)を送る。

大政翼賛会・1940＝55歳

日米開戦・1941＝56歳

兄の介護に疲れ切った義姉末子がくも膜下出血で倒れ、自ら胆石で苦しみながら、兄夫妻を介護するという
苦境、塩田への手紙でお手伝い求人依頼する一方、マタイ伝の一部の口語訳も依頼し、平易な文に共感、
泊江の塩田宅(雀のお宿)をはじめ訪問(第1回)、作者から読者を訪問するという稀有な例になる。塩田訳
も取入れた「鳩の話」刊行。開戦直後に発行された雑誌(新風土)に、自らの中立的立場を明言。

..... 1942＝57歳

詩集「飛鳥」で初めて(岩波書店)以外から刊行。義姉末子に続いて、いわば恋人だった妙子が死去、島田和
子と結婚した式当日、兄金一が自殺、兄の遺体の隣室で新婦との初夜という、特異な死者観で、生活はもちろ
ん、思想的にも大きく変化。その後も近親の死ばかりか、出入りしていた青年たちの出征が続くなか、

創価学会検挙1943＝58歳

妻とともに、塩田宅を訪問(第2回)。塩田宅を訪問(第3回)。塩田召集の連絡を受け塩田宅を訪問するも(第4
回)、勘助宅に向かう塩田と行違い、再訪。静養のため静岡県県織村に移住し、そのまま疎開。

敗戦..... 1945＝60歳

服織村の羽鳥に移り、妻の妹2人も疎開してきて同居。赤坂の家屋を戦災で焼。末子を哀惜する「蜜蜂」刊行。
ボルネオにいた塩田の唯一の慰めは勘助の著作で、「蜜蜂」も一冊配給、むさぼり読んだという。

新憲法公布・1946＝61歳

親友岩波茂雄が死去。最初に復員した庄司が早速羽鳥に来訪、その後、沼津の庄司宅を訪れているところに、
復員した塩田と遭遇、その形相のひどさに強い印象を受ける。「ひばりの話」「鶯の話」「鶴の話」を発表。

新憲法施行・1947＝62歳

極東裁判決・1948＝63歳

「余生」刊行。復刊した「やまびこ」を送られ、塩田宅を初訪問の時のことを、「雀のお宿」と題して発表。
「雀のお宿」を含む戦後初の著書「鶴の話」を塩田に送付し感激させる。帰京して中野区新井の妻の実家に、
妻の妹2人と同居、諸病で寝込むなか、別人のように元気になった塩田らとの交流再開。

三大事件・1949＝64歳

朝鮮戦争始・1950＝65歳

独立回復・1951＝66歳

メデー事件・1952＝67歳

TV放送始・1953＝68歳

越生の塩田宅訪問(第5回)。「鳥の話」をまとめた「鳥の物語」を刊行。「白鳥の話」「いかるの話」発表、
野上豊一郎が死去。体調はなおすぐれず、胃腸も悪化、食事制限になるが、持ち直すことも。
詩集「菓科」。『童話の門 続「銀の匙」』を発表。*NHK番組「私の本棚」で「銀の匙」がとりあげられるや話題に。
「鷹の話」「こまの歌」発表。塩田の提案で、勘助を囲む(坐忘会)が発足、盛り上がり、沼津にも小旅行。
「朝日新聞」に「すずめのお宿」を発表。多病で闘病続ける女性読者からの手紙と闘病記「みこころのままに」に
感動、「おみかんさん」と呼んで文通、妻との京都、奈良に旅行の途中に見舞っている。

自衛隊発足・1954＝69歳

55年体制始・1955＝70歳

国連加盟・1956＝71歳

なべ底不況・1957＝72歳

イサカブーム・1958＝73歳

美智子妃・1959＝74歳

安保闘争・1960＝75歳

タイタイ病始・1961＝76歳

全国総合計画1962＝77歳

TV宇宙中継始1963＝78歳

東京オリンピック 1964＝79歳

大学紛争始・1965＝80歳

鈴木範久「中勘助せんせ」、

妻らと、塩田宅訪問(第6回)するが、衰弱著しく、胆石病のため日本医科大学病院に入院。
退院するも、手足はすっかり細くなるが、全集の準備にとりかかり、{角川書店}による刊行が決定、
小品集「くひな笛」刊行、随筆「猫の親子」発表。服織中の校歌作詞。庄司辰雄に招かれ、塩田と沼津に、
感冒より肺炎を併発、一時危篤。
京都に旅行、この時も「おみかんさん」を見舞う。
中断繰り返した「中勘助全集」がようやく刊行開始も、編集委員で親友の和辻哲郎が死去して衝撃。
京都、奈良に旅行。塩田ら坐忘会主催による喜寿および全集出版祝いが、箱根湯の花ホテルで開催。
塩田が、村山の白十字病院に転院した「おみかんさん」を連れて来訪。
*「中勘助全集」が完結、朝日文化賞を受賞、塩田と最後の対談翌日、くも膜下出血で入院し、没した。
富岡多恵子「中勘助の恋」、インターネットFC2ホームページ、Wikipedia、